

## 遥かなるザルツブルグ

### ——塩の城 ザルツブルグ——

遅いビジネスランチからオフィスに帰ってくると、机の上に郵便物の束が置いてある。その中に、ミネアポリス（米国ミネソタ州）のハムリ弁護士からの礼状があった。彼は知的財産専門のファームのパートナーである。

訪日に際しては、妻とわたしを歌舞伎とディナーに招待していただき有り難うございます。夜の付き合いを避けている矢部さんが、わたしたちと付き合っていたいたことに感謝します……。

夜の付き合いを避けているのは事実だが、誰からそのことを聞いたのだろうか？ 苦笑いしながら、わたしは2年前彼の事務所を訪れた時のことを思いだした。

仕事の打ち合わせが終わった後、彼はわたしと同行の弁理士を「サウンド・オブ・ミュージック」に招待してくれた。分厚いステーキの食事つきのミュージカルである。いかにもアメリカ的だった。

ミュージカルの舞台はオーストリアのザルツブルグ。そういえば、昔妻と一緒に「塩の城」を訪れたものだった……。

オーストリアの北西、ドイツ国境に近いザルツブルグは、古くから塩の交易で栄えた（ザルツブルグは文字通り「塩の城」を意味する）。すでに紀元前7世紀から、ケルト人はアルプス山中の洞窟で岩塩を採掘していた。肉や食料品の保存に欠かせない塩は、古代から「白い宝石」として尊重された。塩は銀と同じ重さで取り引きされた貴重品だった。

人口14万人のこの小さな街は、雪を頂くアルプスの山並に囲まれ、美しく瀟洒な古都である。モーツアルトやカラヤンの出生地としても知られる。

かつてキリスト教が、1200年にわたってこの地方に強大な権力をふるった。ホーエンザルツブルグ城、ドーム（大聖堂）、ミラベル宮殿、レジデンツ（大司教の住居）など、現在の観光名所のほとんどは、大司教の富と権力の象徴であった。

ザルツブルグの見所は、なんといってもホーエンザルツブルグ城である。この古城は、ドイツ皇帝とローマ法王が争った時、法王側にたった大司教ゲーブハルトが皇帝派の攻撃から街

を守るために建築した。メンヒスベルクの丘にそびえ、ザルツブルグ市内のどこからも眺めることができる。

#### ——ミラベル宮殿のヒッピー——

街の北方に位置するミラベル宮殿は、17世紀の初め大司教ディートリッヒが、愛人サロメとその15人の子供のために建てた。ミラベルとは「美しい眺め」を意味するように、季節の色とりどりの花と緑と噴水が美しい華麗な宮殿である。

宮殿の絢爛たる大理石の広間では、シュロス・コンサート（宮廷コンサート）が開かれ、モーツァルト、ハイドン、シューマンなどの室内楽が定期的に演奏される。

宮殿の前には手入れの行き届いたミラベル庭園があり、ギリシャ神話をモチーフにした石像が並び、季節の花が幾何学模様に咲き乱れる。

思い出に浸っているうち、ふとわたしは脈絡もなく、2人の若者のことを思いだした。

庭園の片隅に緑の小径があり、その小径の入口にヒッピー風の若者たちが、大きな布を地面に広げて座っていた。

2人とも20代後半。髪を長く後ろまで垂らしている。通り過ぎる観光客を相手に、イヤリングや腕輪などの安物のアクセサリを売っていたが、誰も立ち止まりもしない。

わたし達が通りかかると2人のボソボソと話す声が聞こえた。

シケてるなー。こんなに売れないんじゃ、もっと安くしようか……。

思いがけず日本語だった。日本人だったのだ。わたしと妻はおどろいて顔を見合わせたが、彼らはわたし達に気付かず話し続けていた。

あれからもう16年の時が流れた。彼らとは何の縁もないが、不思議なことにいまになって突然思い出した。あの若者達もいい中年の親父になっているだろうか。

#### ——モーツァルトがいっぱい——

かつての塩の城もいまは音楽の都である。世界でこの街ほど音楽の溢れる街はない。

ドーム(大聖堂)では、6千本のパイプをもつヨーロッパ最大のパイプオルガンが鳴り響く。レジデント広場にはバロック風の噴水が吹き上げ旅情を慰める。州庁の鐘楼（グロッケンシュピール）は、1日3回7時、11時、18時にモーツァルトの音楽を奏でる。音楽祭で演奏されるモーツァルト、大噴水の水の音、鐘楼の鐘の音、教会のパイプオルガンの響き、この街は音楽に囲まれて生きてきたのだ。

この街にはモーツァルトが溢れている。「モーツァルトの生家」、7年間の青春時代を過ごした「モーツァルトの家」、モーツァルトの記念像が立つ「モーツァルト広場」、カラヤンも学んだ「モーツァルテウム」（音楽院）、モーツァルトの姉ナンネルの墓がある「聖ペーター教会」など。モーツァルトにちなんだ観光スポットに事欠かない。

春から夏にかけて催されるイースター音楽祭、聖霊降臨コンサート、ザルツブルグ音楽祭では勿論、モーツァルトの曲目が好まれる。

人形劇場は、1メートルほどの大きな操り人形で有名である。ここでも『魔笛』や『フィガロの結婚』などモーツァルトの出し物が演じられる。

話は脇道にそれる。この音楽の天才は、作曲に苦勞したことがあったのだろうか？

天上から聞こえる音楽をそのまま楽譜に写しとったかのように、彼の作品は明るく、自由で、自然で、屈託がない。技巧に走るところがない。

ホルン協奏曲第1番、ピアノ・ソナタ第16番、第17番などを聴くと、仕事や生活のストレスも忘れる。心が軽やかになる。

「心に<sup>けいげ</sup>罣なし」とは、「とらわれ」や「こだわり」のない心の持ちようをいう。仏教の教えである。彼の音楽からは自由で穏やかな人物を想像するが、実際のモーツァルトは、品行も悪く、浪費癖があり、罣だらけだったらしい。

いまは天才の名をほしいままにするモーツァルトも、若いときの賞賛と名声も長く続かず、死の直前は経済的にどん底にあった。彼は不遇のうちに35才の若さで死んだ。

### ——懐かしきサウンド・オブ・ミュージック——

人生は思い出の回転木馬、思い出はさらに思い出を呼ぶ。そういえば妻はトラップ大佐の館をみて感激したものだった……。

小さな湖に面したトラップ大佐の白い館（レオポルド・クローン宮殿）は、ホーエンザルツブルグ城を背景にして、美しい姿を見せていた。マリアと子供達はこの湖で遊んだのだ。高校時代からサウンド・オブ・ミュージックのファンだった妻は、映画そっくりの白い瀟洒な宮殿を見て、なかなかその場を去ろうとしなかった。

やがて娘と息子が成長して物心がつくようになると、家族でサウンド・オブ・ミュージックのビデオを繰り返し楽しんだ。ナチスに追われたマリアとトラップ大佐がどうなるか、わたし達夫婦もハラハラ、ドキドキしたものだった。

その度に妻は、ザルツブルグの遠い思い出を子供達に得々と語った。  
マリアと子供達がドレミの歌を歌ったのがミラベル庭園の噴水。ナチの軍隊が行進していた  
ところがドーム広場とレジデント広場。トラップ一家がナチの追跡を逃れるのを助けたのは  
ノンベルク尼僧院の尼僧達。マリアとトラップ一家がナチへの抗議をこめて「エーデル  
ワイス」を歌ったのが祝祭劇場……。

エーデルワイスよ  
毎朝わたしに微笑みかける  
愛らしく清らかに輝く  
わたしに会えた喜びにあふれて  
雪のように白い花よ  
咲きほこれいつまでも  
エーデルワイスよ  
永遠に祖国を守っておくれ

こうしてザルツブルグの思い出は、思いがけず家族の団らんに役立った……。

ハムリ弁護士の手紙をきっかけに昔の思い出に浸っていると、電話が突然鳴って、ふとわたしは思い出から返った。後にわたしは彼に返事を書いた。

It was a pleasure for me to welcome you to Japan, and hopefully, return  
the wonderful hospitality you showed us during our visit to Minneapolis.

I have many fond memories of the trip, especially of seeing "The Sound of Music" at the theater.

(来日の際はお会いできてよかったです。わたし達たちが、ミネアポリスで受けた歓迎の何分の1かでも、お返しできれば嬉しいかぎりです。サウンド・オブ・ミュージックなど、ミネアポリスへの旅はたくさんの楽しい思い出でいっぱいです。)